

海外進出のキーワードは“人材”

-海外との交流は社員の価値観も変化-

「泣き笑い」シリーズ第22回のテーマは“海外進出”です。今回取材したのは、鍛え抜かれたコーティング技術であらゆる産業分野にソリューションを提供している日本フッソ工業(株)の豊岡敬社長です。社長は、同友会副代表理事、オンリーワン研究会会長、日中経済交流研究会顧問としての顔も持っているということで、海外出張の合間をぬっての短時間の取材となりました。



日本フッソ工業(株)
代表取締役
豊岡敬氏
(河南支部)

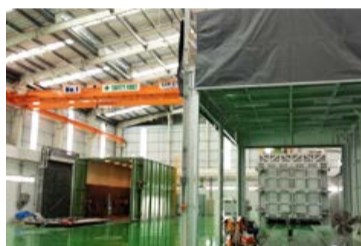
日本フッソ工業(株)の海外進出のきっかけは、先代社長の60歳での海外留学で、アメリカのシリコンバレーでした。もともと、先代は学生時代ロシア文学を学び、いつかは海外を舞台で活躍したいと思っていました。

アメリカ進出は需要不足、人材不足などで撤退を余儀なくされますが、半導体の本場シリコンバレーに工場があるという事実は、国内での半導体ビジネスの急成長の波に乗り順調に業績を伸ばしました。日本での業績とアメリカでの経験を生かしての韓国進出は、最初は不調でしたが、同友会で学んだ「人を生かす経営」を実践し、社員教育に力を入れることで、見事に難局を克服します。

リーマンショック以降、生産の拠点が東南アジアに移る中、地理的に中国、インド、アセアンの中心タイを新たな拠点とし、アメリカ、韓国での経験を重ねた社員が、活躍の舞台に上がっています。また、社内に外国人社員が存在していることは、社員の価値観に変化が起り、何事にも積極的に行動するようになりました。先代の気概が受けつかけられているのかもしれません。

最後に、先代社長が留学した時、豊岡さんは社長就任前の30歳。社長が不在の期間を先代が与えてくれた独り立ちへの試練の時ととらえ、懸命に努力したそうです。豊岡さん自身が、経営者として鍛えられた時間だそうです。

よく、中小企業の海外進出は、お客さんの海外移転やコストカットが理由になりますが、日本フッソ工業(株)の場合少し違う一面があったような気がする取材になりました。



同友会会員へのメッセージ

ふっ素樹脂は、くっ付かない、よく滑る、薬品に腐蝕しない、不純物が出てこない、絶縁性が高い、等々の色々な特徴を持ったプラスチックです。日本フッソ工業では、このふっ素樹脂のコーティング・ライニングによって、その時代、その時代に日本の産業が抱える課題問題を解決してきました。海外進出は、先代社長の「海外でビジネスを展開したい」という熱い想いから始まったのですが、今日では、お客様の生産拠点が海外に広がっているという事情もあり、我々もグローバルに貢献して行かないとならない状況に変わってきています。これからも世界の産業の発展にお役に立てる企業でありたいと願っております。

「泣」

「半導体ビジネスはやらない」が口癖だった父親が、60歳でカリフォルニア留学をした時に、突然「これからは半導体」とアメリカ(シリコンバレー)進出を決めました。多額の投資をしましたが、シリコンバレーが既に空洞化していたことや、環境基準の厳しいことなど調査不足でした。また、サブプライムローン問題に端を発したアメリカバブルの崩壊の兆しを感じたこともあり2007年撤退しました。韓国に進出した時は、韓国の商売のやり方でスタートをしましたが、業績は好転せず苦しい時代を経験しました。



「笑」

韓国人経営者は身内を重用し、社員に任すことはしませんでした。社員がやりがいを持って働きませんので、社内に覇気がありません。韓国人経営者との激しいやり取りの末、日本フッソ工業の「人を生かす経営」を韓国に持ち込みました。韓国入りした副社長、総務部長、営業部長、工場責任者の4名が実践を繰り返してくれましたので、業績は好転しました。やはり、海外進出のキーワードは人材です。業績の好転とともに、対立関係にあった韓国人経営者も、役所や銀行、地域社会といった我々には不慣れな部分で力を発揮してくれるようになりました。

この時の副社長がタイに赴任しています。韓国での経験を土台に新天地タイで現地社員ともに「人を生かす経営」を実践してくれています。



「取材を終えて」

日ごろから、活動範囲や、視野の広さを感じさせてくれる豊岡さんからは多くの学ぶべきところがあります。今回の海外進出のテーマからも沢山の気づきがありました。

初めて海外展開したシリコンバレーでは、その後に訪れるリーマンショックをいち早く予測し、撤退。韓国への進出時は当時起こっていた通貨危機の中、韓国の早い立ち直りを予測をし、進出を決断。その先を読む目、情報力そして素早い行動力に驚愕し、少しでも見習いたいと感じました。

業績が上がらない韓国の会社を立て直す時の判断やその戦略には、人間尊重の精神を元に社内改善をし回復させた話からは、自分自身が同友会運動にたずさわり、活動していくことに対して自信を持つことができた取材でした